

文化二年「天草崩れ」と宗門改帳

―肥後国天草郡崎津村文書を中心に―

東 昇

はじめに

肥後国天草郡崎津村は、文化二年（一八〇五）の「天草崩れ」における中心地である。「天草崩れ」は、崎津村を含む大江、今富、高浜村四ヶ村で、全人口一〇六六九人の約半分にあたる五二〇五人のキリスト教信者（キリシタン、切支丹）が摘発された事件である。^①

日本におけるキリスト教信仰は、天文一八年（一五四九）のイエズス会ザビエルによる日本布教以来、九州を中心に広まった。しかし一六世紀末豊臣秀吉の禁令に始まり、寛永一四（一五三七）一六三八）に起こった島原天草の乱以降、キリスト教の取締りが厳重となり、寛文五年（一六六五）の全国的な宗門改制度の確立により、表面上は日本にキリシタンが存在しないこととなった。しかしその後、明暦三年（一六五七）肥前大村藩「郡崩れ」、万治三年（一六六〇）豊後臼杵、竹田、府内藩等「豊後崩れ」、寛文元年（一六六一）尾張藩「濃尾崩れ」、寛政二年（一七九〇）肥前幕府領「浦上一番崩れ」と、キリシタンの摘発が続き、多くの処罰者がでた。^②

しかしこの「天草崩れ」のキリシタンは、キリスト教ではない異宗

を信仰していた「心得違」として、一人の処罰者もでなかった。この決定には、当時この地域の幕府領を預かっていた島原藩が、大量処罰者を出して百姓一揆の誘発を防ぐという意向が働いたといわれている。^③

崎津村は、心得違者全体五二〇五人の三三％にあたる一七〇人、村の人口二三六八人の七二％も占めるキリシタンの多い地域であった。このように崎津村は、キリシタン研究の重要な地域であるにもかかわらず、後述する戦前の長沼賢海の研究以来、基礎的史料である宗門改帳の分析はない。

本稿では、近年目録公開で明らかになった崎津村の宗門改帳の史料群を素材に、まず長沼賢海による史料群の発見、利用と研究史との関連について整理する。次に宗門改帳の種類、冊数、名称などの基礎構造、「天草崩れ」による帳面の変化など史料学的に分析する。そして宗門改帳から浮かび上がる疱瘡流行や、家の分割など崎津村の実態について、隣村高浜村の上田家文書も参考にしながら考察したい。

一 崎津村文書と研究史

一―崎津村と崎津湊

近世の崎津村は、肥後国天草郡に属し、慶長五年（一六〇〇）年以降、一七世紀前半に寺沢広高、山崎家治、戸田忠昌等の藩領となったこともあるが、寛文一二年（一六七二）以降は幕府領であった。幕府領時代、天草、長崎、日田代官、西国郡代、島原藩預かりなど統治者はたびたび変遷している。⁽⁴⁾ 天草郡は大庄屋制をとり、崎津村は大江組八ヶ村の一つであった。

地理的には天草下島の西海岸に位置し、東シナ海に面した天然の良港であった。そのため漁船基地、廻船の寄港地、唐船漂着など、村というより港としての役割が大きい。隣村高浜村庄屋上田宜珍（一七五五―一八二九）⁽⁵⁾の著した「天草島鏡」によると崎津村は、文政年間、石高二八石二斗五升四合五勺、家数二五四軒、人口一八六五人（男九六六人、女八九九人）である。⁽⁶⁾ 港の状況について、天保一三年（一八四二）八月長崎代官高木作右衛門の書付には、代官所支配地の枕島、牛深、崎津湊の主要三港について次のように記している。⁽⁷⁾

右村々之儀は近国所々通商之旅船風待汐繫等仕候湊、高不相応之多人数二而耕作不引足漁業重二相稼、船宿等之余力を以相続仕候困窮之所柄二御座候処（中略）

右三ヶ所之儀は辺鄙なから湊立旅船入込も多く所之潤二も相成候この三港は、商業に従事する廻船の港であり、石高に比して人口が多く、住民の生業は主に漁業で、船の出入りが多いため廻船の船宿を

経営する者があるという状況であった。慶応三年（一八六七）十一月大江組の「諸運上物并農間諸稼其外書上帳」によると、崎津村には「諸廻船附船宿」一七軒が存在したことがわかる。⁽⁸⁾ これは大江組の八ヶ村中で唯一の記載であった。

同じく「天草島鏡」所収の上田宜珍作の「あまくさ島めぐり長歌」には、崎津村は次のように詠われている。

はなの崎津に つきにけり みぬもろこしの ふねまでも
さしているてふ みなとゆゑ さしのつとしも いふならめ
ここにもなみの うかれ女あり うたふも網子の 網引する
こゑにまがひて にぎはへる⁽⁹⁾

ここでも廻船の港、漁業の村としての繁栄が記されている。唐船の漂着についても示唆しているが、崎津村には唐人通詞が置かれる場合があった。⁽¹⁰⁾ 港として重視された崎津村には地役人である遠見番、山方役が設置された。遠見番は享保二年（一七一七）二名が置かれ、職務は異国船の通報と抜荷の監視であった。山方役は延宝元年（一六七三）に五人置かれるが、明和七年（一七七〇）以降一人となり、職務は山方運上銀の取立と山林の管理であった。⁽¹¹⁾ 崎津村では村人以外に、明和七年以降、遠見番二人、山方役一人、唐人通詞が置かれていた。

一―崎津村文書の概要

この崎津村の庄屋吉田家旧蔵史料が、九州大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門に所蔵される「崎津文書」である。この「崎津

文書」の存在については、目録公開以前から地元天草でも指摘されていた。天草において歴史研究を進め上田家文書調査、上田宜珍日記刊行に力を尽くした平田正範は、一九八二～八三年天草毎日新聞に連載した「天草崩れについて」第六章「村明細」の中で次のように述べている。「残念なことは、崎津村庄屋吉田家文書が、早い時期に不明となり、現在九州大学に納まっているようで吾々の手で中々調査出来ない事である」とあり、吉田家文書が九州大学に存在していることを、約二五年前に指摘していた¹²⁾。

「崎津文書」は総点数二五五点の文書群であるが、その半数である七〇点が宗門改関係の文書である。その期間は元文六年（一七四一）三月一日「〔酉年宗旨御改増減帳〕」から、明治四年（一八七二）「人別（書上帳）」まで、寛政八年（一七九六）からは約八〇年、欠年はあるがほぼ継続している。これらの文書には、受入印と考えられる九州大学図書館の丸印があり、昭和三十一年（一九五六）三月二四日とある¹³⁾。

この他、同じく九州文化史資料部門が所蔵する「九州文化史所蔵写本」の中に崎津村関係の写本がある。この写本は、戦前期、九州文化史研究所が実施した西日本各地の史料を謄写した史料群である。崎津村関係では、「天草郡崎津村宗旨改二関スル書類」二七冊、「崎津村庄屋記録」一〇件がある。「崎津村庄屋記録」は、漂着唐船、遠見番など海事に関するもの、酒造、相続方仕法に関するものを中心である。この中で原本である「崎津文書」と写本の宗門改帳を比較すると、写本にしか存在しないものがある。文化三年（一八〇六）「異宗絵踏帳」、

嘉永五年（一八五二）「異宗回信者踏絵帳」、安政三年（一八五六）「異宗回信者踏絵帳（仮題）」の三冊である¹⁴⁾。これら写本の筆写年代は九州文化史資料部門所蔵史料目録データベースによると、昭和七年（一九三二）である¹⁵⁾。たとえば文化三年「異宗絵踏帳」には、九州帝国大学図書館の丸印に、昭和八年六月五日とあり、九州帝国大学文学部内に前身となる九州文化史研究所が設置された昭和九年直前の写本である。

また九州大学附属図書館六本松分館所蔵の「檜垣文庫」にも崎津村の宗門改関係の文書がある。「檜垣文庫」は、教養部で国史学担当であった檜垣元吉名誉教授（一九〇六～一九八八）の収集資料である。文化三年四月「寅年宗旨御改影踏帳」、享和元年（一八〇一）二月「酉年宗旨御改願踏帳」、「覚（明治初期の戸籍）」の三冊が該当する¹⁶⁾。これ以外にも数点、崎津村関係の文書がある¹⁷⁾。これら「崎津文書」と檜垣文庫中の文書をあわせて崎津村文書と呼び、この中で宗門改帳は表1の七四冊である。

一―三長沼賢海の崎津村宗門改帳研究

これらはどのような経緯で各所蔵機関に収蔵されたかは不明であるが、その手がかりを崎津村文書を使った最初の研究といえる長沼賢海の論文の中から探ってみたい。長沼賢海（一八八三～一九八〇）は、大正一三年（一九二三）より九州帝国大学文学部の国史学初代教授を務め、九州文化史研究所を創設した一人である¹⁸⁾。長沼賢海の主要な研究は、海事史、宗教史をはじめ西日本各地をフィールドとする文化

表1 崎津村宗門改帳目録

番号	名称	年月日	出典
1	(酉年宗旨御改増減帳)	(元文6年3月11日)	1
2	寅年宗旨御改増減帳	天明2年	2
3	寅年宗旨御改増減帳	天明2年	3
4	辰年宗旨御改増減帳	寛政8年3月	4
5	巳年宗旨御改増減帳 式番	寛政9年3月	5
6	申年宗旨御改増減帳 式番	寛政12年3月	6
7	酉年宗旨御改増減帳 式番	享和元年2月	檜垣 190-6
8	亥年宗旨御改増減帳 式番	享和3年3月	7
9	丑年宗旨御改増減帳	文化2年4月	8
10	丑年宗旨御改増減帳	文化2年4月	9
11	寅年宗旨御改増減帳 壹番	文化3年4月	写本、檜垣 128-4
12	寅年宗旨御改増減帳	文化3年4月	10
13	異宗繪踏帳	文化3年	写本
14	辰年宗旨御改増減帳	文化5年4月	11
15	辰年宗旨御改増減帳	文化5年4月	12
16	異宗回信之者繪踏帳 壹番	文化5年4月	13
17	辰年宗旨御改増減帳	文化5年4月	14
18	巳年宗旨御改増減帳	文化6年	15
19	午年宗旨御改増減帳	文化7年	16
20	未年宗旨御改増減帳	文化8年	17
21	戌年宗旨御改増減帳	文化11年	18
22	亥年宗旨御改増減帳	文化12年3月	19
23	亥年宗旨御改増減帳	文化12年3月	20
24	丑年宗旨御改増減帳	文化14年3月	21
25	異宗回信之者繪踏帳	文化14年3月	22
26	丑年真宗御改増減帳	文政12年	23
27	寅年宗旨御改増減帳	文政13年2月	24
28	辰年真宗御改増減帳	天保3年2月	25
29	巳年宗旨御改増減帳	天保4年3月	26
30	午年宗旨御改増減帳	天保5年	27
31	異宗回信之者繪踏帳	天保10年2月	28
32	丑年宗旨御改増減帳	天保12年	29
33	寅年宗旨御改増減帳 小控	天保13年	30
34	卯年宗旨御改増減帳 小供控	天保14年2月	31
35	辰年宗旨御改増減帳	天保15年	32
36	巳年宗旨御改増減帳 小供控	弘化2年	33
37	異宗回信之者繪踏帳	弘化2年	34
38	増減書上帳	弘化3年3月	35
39	異宗回信之者繪踏帳	弘化3年3月	36
40	未年真宗御改増減帳	弘化4年	37
41	申年真宗御改増減帳	弘化5年	38
42	異宗回信之者繪踏帳	弘化5年2月	39
43	酉年真宗御改増減帳	嘉永2年	40
44	酉年宗旨御改増減帳 子共控	嘉永2年	41
45	酉年宗旨御改増減帳	嘉永2年	42
46	亥年宗旨御改増減帳	嘉永4年	43
47	子年宗旨御改増減帳 子供控	嘉永5年	44
48	異宗回信之者繪踏帳	嘉永5年	写本
49	丑年真宗御改増減帳	嘉永6年	45
50	丑年宗旨御改増減帳 本禪控	嘉永6年	46
51	寅年宗旨御改増減帳 子供帳控	嘉永7年	47
52	異宗回信之者繪踏帳	嘉永7年	48
53	増減書上帳	安政2年	49
54	異宗回信之者繪踏帳	安政2年	50
55	(辰年宗旨御改増減帳) 子供帳控	安政3年	51
56	異宗回信之者繪踏帳(仮題)	安政3年	写本
57	異宗回信之者繪踏帳	安政6年	52
58	未年真宗御改増減帳	安政6年	53
59	宗門人別御改帳 子供帳控	万延元年8月	54
60	異宗回信之者宗門御改帳	万延2年3月	55
61	宗門人別御改帳 子供帳控	文久2年3月	56
62	異宗回信之者宗門御改帳	文久3年2月	59
63	宗門人別御改帳 本禪控	文久3年2月	60
64	増減書上帳	文久4年	61
65	宗門人別御改帳 子供帳控	文久4年	62
66	宗門人別御改帳 真宗控	文久4年	63
67	異宗回信之者宗門御改帳	文久4年	64
68	宗門人別御改帳 子供帳控	元治2年2月	65
69	宗門人別御改帳 本禪宗控	元治2年2月	66
70	増減書上帳	元治2年2月	67
71	増減書上帳	慶応2年2月	68
72	宗門人別御改帳 本禪宗控	慶応2年2月	69
73	人別書(上帳)	明治4年	70
74	(戸籍)	明治4年頃	檜垣 247-1

出典：写本（「九州文化史所蔵写本」）、檜垣（「檜垣文庫」）、記載のないものはすべて「崎津文書」である。

史研究の先駆けであり、『日本海事史研究』、『日本宗教史の研究』¹⁹など主要な著作がある。

長沼の著作の中で、最初に崎津村文書について触れているのは、昭和二年（一九二七）に成稿した「天草はなれ切支丹の研究」²⁰である。この論文の「第三章其の他の天草のはなれ切支丹」、「第二節富津村の糾明」に次のように記している。

崎津村の方に就いては、稍々史料を得た。同村のものと役座（旧庄屋）吉田彬氏は、大長持ちに三棹、其の外小長持ちに二棹も庄屋時代の書類を保存してゐる。私は三日間か、つて其の中から海事史料と切支丹史料とを撰り出した。切支丹史料の主なものゝは宗門改帳であつて、天明頃の分から飛び／＼に明治維新前後まで数十冊遺つてゐる。それと文化二年の信者発覚の際の糾明帳一冊遺つてゐる。その表紙に「異宗御呼出御糺方日記、文化二年丑八月九日、崎津村庄屋」とあり、九日より十二日までに、約千人ばかりのかくれ切支丹を呼出して糾明した日記である。

長沼は、崎津村の旧庄屋吉田彬氏宅で大長持三棹、小長持二棹の近世文書を調査している。氏の関心のあつた海事、切支丹関係の資料を選定し、これを借用後写させ、九州文化史研究所の写本としたと考えられる。その内容は天明から明治までとあり、現存する文書群とほぼ同内容といえる。しかし最後に書かれた文化二年の天草崩れに関する糾明帳は、現在不明である。同様の内容が翌年発表の「江戸時代に於ける天草の切支丹——文化二年に於ける高浜村切支丹の検断——」に記されている。²¹ここでは、「崎津の吉田家に旧庄屋時代の書類が大長持三

棹、小さいのが二棹もあるが、人別帳の外に、切支丹に関するまとまつた記録がない」とある。

別の箇所では、「吉田氏所蔵の宗門改帳の中で、文化五年のものが、最も同二年の糾明事件に近い時のものである」、「その一冊に「異宗回信之者影踏帳」一冊ある」と記している。²²これは原本、写本ともに現存する文化五年の異宗回信者の宗門改帳のことである。²³実際には写本のみであるが文化三年「異宗絵踏帳」が現存しているので、この糾明事件に近い史料という指摘は正しくない。この論文執筆時点では、この文化三年の史料が見つからなかった可能性もある。

また長沼はこの文化五年の史料から異宗回信者が総数七九六人、男三九五、女四〇一人として、三年前の天草崩れの一七一〇人から大幅に減少していると書いている。しかしこれは異宗回信者の総数ではない。この史料は「異宗回信之者影踏帳 巻番」とあるように、異宗回信者の宗門改帳は数冊存在したのである。宗門改帳の冊数については後述するが、文化五年四月「辰年宗旨御改影踏帳」の人数合計には「四帳寄」と記されており、真宗一冊、異宗回信者以外（禪宗）の「素人」一冊、異宗回信者（禪宗）二冊と考えられる。同史料には、それぞれの人数も記され、異宗回信者は総数一六一〇人（男八〇七人、女八〇三人）とあり、先の長沼の出した七九六人という数字は、その一部であることがわかる。そして文化二年天草崩れの異宗回信者一七一〇人と比較すると三年で一〇〇人の減少であり、長沼の指摘するような急激な減少とはいえない。

長沼の研究の中で興味深いのは、「天草はなれ切支丹の研究」の附

録で「文化九年異宗回信之者影踏帳、天草郡崎津村扣」をあげ、疱瘡死者に「疱」印があることを指摘している。⁽²⁵⁾しかし現存する文書の中にこの文化九年の史料はない。長沼の論文作成時点では、ごく少数であるが、現存する史料以外に宗門改帳が存在していた可能性がある。先の文化三年の史料のように、現存史料と長沼調査時の史料に差異があったと考えられる。なお疱瘡に関する同様の記載は、天保四年（一八三三）「巳年宗旨御改踏絵帳」にあるが、これについては三で後述したい。

二 宗門改帳の基礎構造

二―宗門改帳の種類と冊数

現存する崎津村の宗門改帳は七四冊であるが、いわゆる全村民の宗門、名前、年齢を記した宗旨御改帳は五九冊、生死、引越などに際して村民の移動を記した増減帳は一五冊である。天草において代官へ提出する宗門改帳の文書の種類については、各村の明細帳に詳しい。寛延三年（一七五〇）高浜村の明細帳には、「毎年差上申候諸帳面之訳」として「宗旨御改帳、同増減帳、行違人書付、病人書付、長崎奉公人影踏帳」の五点が書き上げられ、「是者宗門御奉行様御改之節村方二而差上申候」とある。⁽²⁶⁾文化元年（一八〇四）福連木村の明細帳には、ほぼ同内容で長崎奉公人影踏帳が除外されている。⁽²⁷⁾

高浜村と同じ寛延三年の内容を写した上野原村の明細帳には、宗旨御改影踏帳、宗旨御改増減帳の二冊が村から差し出す帳面とされている。

⁽²⁸⁾このほか宗旨改関係の書類として、大庄屋の組毎に神文血判帳、長崎奉公人帳、行違人帳、御仕置五人組帳などを提出していた。時期的に変化はあるが、天草の各村では宗旨御改影踏帳、宗旨御改増減帳の二冊が作成されていたことがわかる。上田家文書には明和から慶応までは毎年宗旨御改影踏帳が現存しているが、増減帳はない。⁽²⁹⁾高浜村と比べて崎津村は欠年は多いが、増減帳が現存し、後述する天草崩れの異宗回信者の宗門改帳が存在しているなど、極めて特徴的な宗門改文書群といえる。

先にみた上野原村の明細帳の影踏帳には「大郷人高之村ハ式冊又者三四冊二而も分ケ申候」とあり、人口の多い村は分冊していたことがわかる。高浜村は文化十一年三月二四日の上田宜珍日記によると、宗門改帳を都呂々村酒井氏へ持たせた⁽³⁰⁾とあり、そこには踏絵御改帳五冊とあることから、現存するのは全村分ではなく一部地域のみである。崎津村の場合、寛政九年（一七九七）「巳年宗旨御改影踏帳」には式番、文化五年「異宗回信之者影踏帳」には式番とある。これらは同じ内容の宗門改帳の番号である。

崎津村の宗門改帳は天草崩れを境に、分冊構成が変化する。文化二年前には、文化二年「丑年宗旨御改影踏帳」の人数合計に「三帳寄」とあること、同帳が真宗のみであること、先にみた寛政九年「巳年宗旨御改影踏帳」には式番とあることから禪宗二、真宗一冊の構成であった。真宗関係の宗門改帳は全体で一二冊あるが、すべてに総人数合計があることから、真宗の宗門改帳が最後に位置づけられていたといえる。なお真宗という名称が記されるのは、文政二年（一八二九）「丑

年真宗御改踏絵帳」以降である。崎津村の真宗は京都東本願寺の末寺、天草郡壱町田村安養寺、禅宗は天草郡志岐村国照寺の末寺、大江村江月院の旦那であり、文化二年には真宗一三八人、禅宗二二三九人と、ほぼ九四%の村民が禅宗であり、この宗旨の構成比は幕末までほとんど変化しない。

天草崩れ後の文化三年以降、禅宗の中で異宗回信者とそれ以外（素人）が別帳とされ、文化五年「辰年宗旨御改影踏絵帳」の人数合計に「四帳寄」とあるように、真宗一、禅宗素人一、禅宗異宗回信者二冊の計四冊となる。異宗回信者は一六一〇人であり、人数が多いため二冊にしたと考えられる。この後、文化一二年「亥年宗旨御改踏絵帳」には「三帳寄」とあり、異宗回信者が一〇三八人と減少したため一冊にまとめたと考えられる。

文政一二年「丑年真宗御改踏絵帳」から「帳寄」の記載はないが、異宗回信者の子供の帳面が素人から分冊して、四冊になった可能性がある。この年素人は一二五五人を超えており、翌年の「寅年宗旨御改踏絵帳」には四五一人分しか記載されていないことなどから、素人が分冊されたと考える。この分冊は、表題においても天保一二年の素人子供、嘉永六年の素人本禅と記されるようになる。

二 二帳名の変遷

宗門改帳の名称の変遷については、まず影踏から踏絵への変更がある。文化一〇年島原藩の預地から幕府長崎代官支配へ変更した際、文化六年「巳年宗旨御改影踏帳」から、文化一二年「亥年宗旨御改踏絵帳」

のように変化している。上田家文書では文化一〇年「酉歳宗旨御改影踏帳」から、文化一一年「宗門御改踏絵帳」へと一年ではつきりと切り替わっている³¹。これについては同年三月の触に宗門改帳上書は「宗門御改踏絵帳」と認めるよう指示が出ている³²。またこの変更の際、上田家では十二支の年号が消えているが、崎津村の場合は嘉永七年（一八五四）「寅年宗旨御改踏絵帳」まで書かれている。そして万延元年（一八六〇）閏三月、天草で踏絵廃止後、名称も変更され同年八月「宗門人別御改帳」となっている。

増減帳の名称は、文化一四年「丑年宗旨御改増減帳」までは、十二支＋宗旨御改増減帳であるが、弘化三年「増減書上帳」へ変化している。記載内容は、出生人、死去人、他村江縁付引越候者などがあり、文化五年「辰年宗旨御改増減帳」では、死去人が異宗回信、素人と別に書かれ、幕末まで続いている。この異宗回信と素人の別書は、文化四年三月一日上田宜珍日記に、大庄屋への質問として記されている³³。宜珍は「右異宗回信之者之内死去人并縁付二而増減二書載候分ハ、素人之増減と同帳ニ仕候而宜敷御座候哉」と素人の帳面と同帳にしてよいかどうか尋ねている。

各人の記載項目は、初期の元文六年（一七三七）「〔酉年宗旨御改増減帳〕」には旦那、出生死亡月日、続柄、本人名前、年齢であるが、天明二年（一七八二）「寅年宗旨御改増減帳」以降、家主の名前も付加されている。これは後述するが、一軒あたりの家族数が多いため、続柄だけでは宗門改帳のどの家族に属するかわかりにくく、所属する家主の名前を記したと考えられる。

二―三別帳化された家族

崎津村の宗門改帳の特徴である天草崩れの影響は、同じ家族である異宗回信者と素人の子供を別帳化したことに現れている。天草崩れの異宗回信者を明確にする政策により、その人物が所属する本来の家族がわかりにくくなった。このため次のように本来の家族と家番号で記すようになる。

・弘化二年「異宗回信之者踏絵帳」

持高一石貳升

一 禅宗江月院旦那

「二」

廣助

四十七

(印)

廣助女房

とら

四十八

「まん

善太郎

ゆみ

文二郎」

メ 式人内 男 老 人
女 老 人

・弘化二年「巳年宗旨御改踏絵帳

小供控」

一 禅宗江月院旦那

「二」

廣助妹

まん

三十六

六月三日難船死去

同人嫡

● 善太郎

二十

同人娘

ゆみ

十二

同人二男

文次郎

五ッ

メ 四人内 男 式 人
女 式 人

(注「二」内は朱字)

この廣助の家族、本来なら六人であるが、廣助と女房のとらが異宗回信、妹や息子が素人子供として別帳化されている。そして両方に朱書きで「一」と記し同じ家族であることを示し、当主である廣助の帳面に別帳化された家族を同じく朱書きで記している。このような事例は、天保四年(一八三三)「巳年宗旨御改踏絵帳」からみられる。また異宗回信の宗門改帳は天保一〇年以降、廣助が最初に記されるが、文化一四年は別人が最初である。この変化は素人子供の分冊と朱書きの設定によって、回信者の順番が整理された過程の結果と考えられる。なぜ朱書きが設定されたのか。朱書きが登場する前年、異宗回信五九五入、素人一二五五人となり、異宗回信の減少、素人の増加が理由といえる。異宗回信は文化二年の天草崩れ以降、異宗信仰を捨てて仏教に回信したため増加はあり得ず、死亡、移動による減少のみであった。反対にそれらの子供が含まれる素人は死亡なども含まれているが増加する一方であった。そのため減少した異宗回信の家族を判断するため朱書きを設定したと考えられる。異宗回信が全村民の一割(一四〇

人)を切った嘉永七年以降は、増加し続ける素人の家族の名前を省略し、朱書きで「外何人」と記している。

二―四異宗回信の別帳化への過程

これら異宗回信の別帳化は本来の家族を分断してしまう。最初から順調に実施されたのであろうか。天草崩れの直後、文化四年三月一〇日上田宜珍日記には、「一異宗回信之者共影踏帳一帳に相認候様、御代官様々四ヶ村へ御廻状、夜五ツ時今富分到来」とあり、異宗回信者を別帳化するよう代官から指示があったことが記されている。³⁴翌日、早速宜珍は、大江組大庄屋に対して、別帳化することに対して発生する様々な問題について、以下六項目を問い合わせている。

①御代官様御廻状、夜前今富分相達拝見仕候、然処異宗回信之者影踏帳面別帳ニ相認、素人之帳面相除認候様被仰聞候付而、今日分帳面認替候筈ニ御座候処、右異宗回信之者之内死去人并縁付ニ而増減ニ書載候分ハ、素人之増減と同帳ニ仕候而宜敷御座候哉、

②上書ニ異宗回信之者影踏帳と相認候様被仰下候処、右之分別帳ニ仕候ハ、惣人高メ之所、且奥書等之義も別々ニ仕候義ニ而御座候哉、

③右異宗回信之者帳順ハ去九月再影踏被仰付候節之順ニ仕候而宜候哉、又ハ是迄之帳順ニ仕候而宜候哉、

④右家内之内心得違不仕候者ハ素人之帳面ニ入り申候処、何某家内ト相認可申、左候へハ家数之処書出候ニハ、本家数ニ仕可申候へ共、別帳ニ相成候ニ付而ハ此所致兼候様ニも被存候、

⑤追而当村回信之者皆禪家斗ニ御座候、影踏之節是迄之通真宗分先ニ影踏被仰付候哉、別帳ニ成候ニ付而真宗分後ニ被仰付候哉、且出生之子供ハ素人之帳面ニ入レ申候ニ付而ハ、其親共別帳故為踏候節ハいか、共可仕候哉、扱又病人行違人等帳面ハ素人同帳へ書加へ上候哉、此段も御伺被下度奉存候、

⑥先刻御伺申上候異宗回信之者別帳之義、御思召之処為御知可被下候、且去九月再影踏被仰付候節ハ、十二才已下之分印達ハ不被仰付候得共、此節別帳ニ相認可申哉、又ハ十二才已下ハ相除ケ可申哉ト奉存候

六項目をまとめると、①異宗回信者の死去や縁付きの増減を素人と同帳とするかどうか、②人数合計や奥書の別書き、③異宗回信者の記載順、⑤実際の踏絵の順番と帳面の順番、⑥一二歳以下の取り扱い、について問い合わせ、④異宗回信者の素人家族を「何某家内」と記すことの提案をしている。

そして宜珍は、「右之桁々外村々思召之処如何ニ御座候哉、一通り御伺不被下候而ハ御改之節ニ至差支ニ共相成間敷哉ニ奉存候、御賢慮

を以夫々御伺御指図可被下候、御延引二不相成候様奉待候」と記し、これらの項目を他の村はどう考えているのか一通り伺わなくては宗門改の際に不都合が生じる、大庄屋から各村に聞いて指示してほしいとある。

その直後、再度念を押してか、「弥以差急キ不申候而ハ帳面方出来申間敷、付而ハ右別帳認方之義明日御伺被下候様無御座候而ハ相成間敷奉存候二付、又々申上候」と記し、急いで解決しないと宗門改帳面が作成できない、明日別帳の書き方について指示をもらわなければ宗門改に間に合わないとある。天草崩れの裁定に伴う宗門改帳の書式変更に対して、実際の実務を担当する庄屋であった宜珍の対応がよくうかがえる内容である。これらの質問事項が実際の宗門改帳にどのような反映されたか、その詳細については、今後崎津村の宗門改帳で検証する必要がある。また幕末まで続く異宗回信者を別帳化した理由について、異宗回信者の踏絵二度踏と同様、処罰的な意味、類族帳の方式の採用、宗旨別の宗門改帳別帳化の方式の採用など、いくつか考えられる。現段階ではいずれも可能性があると指摘しておきたい。

三 宗門改帳からみる崎津村の実態

三―一 疱瘡流行と人口

二で述べたように崎津村の宗門改帳は、天草崩れで異宗回信と素人に別帳化されたという特徴があった。次にこの宗門改帳の内容についてを詳細に分析していくと、近世後期の天草における一村落の実態に

ついて、いくつかの興味深い事実がうかがえる。ここでは疱瘡流行と人口、家の分割について検討したい。

崎津村の人口は表2・図1のように元禄四年（一六九二）の八五〇人から上昇し、約一世紀後の一八世紀末の寛政元年（一七八九）には三倍の二四二九人、その後横ばいとなる。一九世紀前半から下降しはじめ、幕末の弘化四年（一八四七）一三三九人となり、その後明治初期に微増している。この一九世紀の人口減少の主要因は疱瘡流行といえる。崎津村の宗門改帳現存時期と重なる疱瘡流行は、享和元年（一八〇一）、文化一〇年（一八一三）、天保五年（一八三三）の三回である。

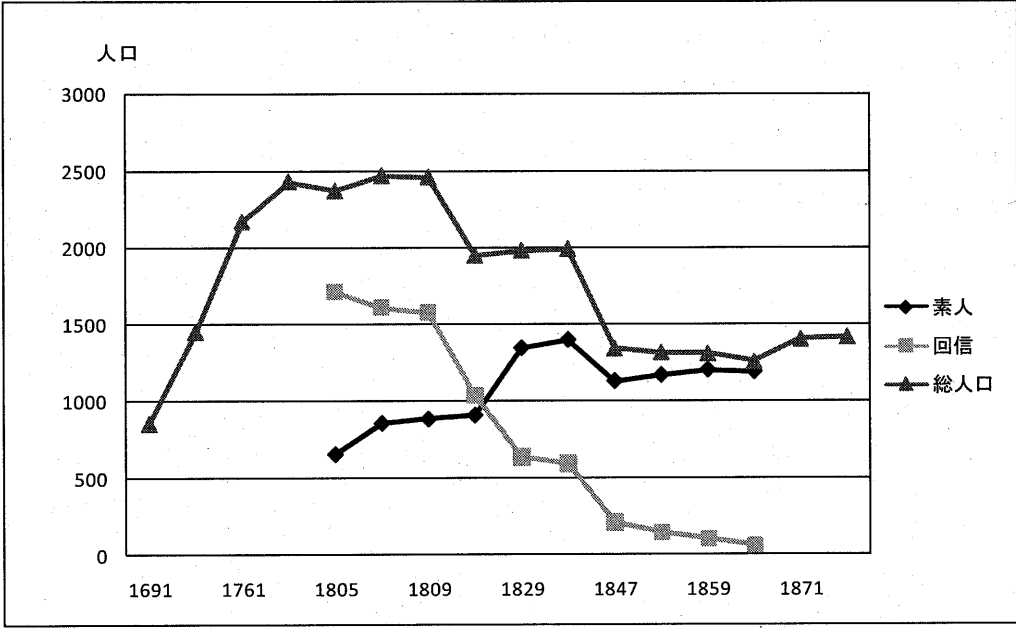
享和元年の疱瘡は、同年「酉年宗旨御改影踏帳」に記録がある。³⁵現存人口一二二六人、男五九三人、女六三三人が記されているが、そのうち「四月二日疱瘡死」等と注記され疱瘡で死亡したものは一二九人、全死者一七七人の七三%にあたり、疱瘡病人も一六人いる。この宗門改帳は一部なので、全体の死者を一番近い文化二年の全体数二二六八人を基準として推計する。享和元年の現存人口一二二六人の約一九倍、それに疱瘡死者一二九人を掛けると二四五人となる。この時の状況は「天草年表事録」によると「享和元年 崎津村疱瘡大流行五百人余相煩候に付、島原分御医師御差越養生被仰付候、近村は不及申郡中分救差遣候、最初死亡多三步通りも助命不仕候処、島原御医師御越候已後は七步通助命仕難有奉存候」とある。³⁶先ほどの死者推計を利用すると、約五〇〇人の疱瘡罹患者の約半分が死去したことになる。

表 2 崎津村の人口変遷

	和暦	西暦	素人数	増減	回信数	増減	割合	合計	増減	出典
1	元禄 4	1691						850		天草島中人高帳
2	享保 17	1732						1448	598	崎津村明細帳
3	宝暦 11	1761						2165	717	崎津村明細帳
4	寛政元	1789						2429	264	崎津村明細帳
5	文化 2	1805	658		1710		72%	2368	- 61	
6	文化 5	1808	856	198	1610	- 100	65%	2466	98	
7	文化 6	1809	883	27	1574	- 36	64%	2457	- 9	
8	文化 12	1815	908	25	1038	- 536	53%	1946	- 511	
9	文政 12	1829	1341	433	639	- 399	32%	1980	34	
10	天保 3	1832	1394	53	595	- 44	30%	1989	9	
11	弘化 4	1847	1128	- 266	211	- 384	16%	1339	- 650	
12	嘉永 6	1853	1166	38	146	- 65	11%	1312	- 27	
13	安政 6	1859	1200	34	105	- 41	8%	1305	- 7	
14	文久 4	1864	1188	- 12	64	- 41	5%	1252	- 53	
15	明治 4	1871						1400	148	
16	明治 5	1872						1414	14	

出典:「天草島中人高帳」(上田家文書)、「崎津村明細帳」(天草古文書会『天草郡村々明細帳』中、1990 年所収)、記載のないものはすべて「崎津文書」である。

図 1 崎津村の人口変遷グラフ



この時、郡内の村々に対して、崎津村へ救物を送るよう五月四日付の触が出されている。⁽³⁷⁾これに対して上田家では五月九日「苦百枚、味噌壹丁但百廿六斤」を崎津村庄屋へ送っている。⁽³⁸⁾その手紙の中で「右之品乍輕少、貴村疱瘡山小屋江差遣度、只今富岡飛船便々頼遣申候間、夫々御配当被成可被下候」と、代官所のある富岡からの依頼により疱瘡小屋への救物として送るとある。

文化一〇年の疱瘡は、上田宜珍の「出勤日記」正月晦日に次のように記されている。⁽³⁹⁾

一大庄屋並二拙者御呼出シ、此度崎津村疱瘡大混乱ニ付組中村々より救差出シ

一崎津村疱瘡病人数何ニほどト申事ハ相分カラズ候へども、字小鍋ニ小屋掛ケ罷リ在リ候看病人共ニハ凡そ式百人ほどト相見ル、梅木山へ逃ゲ籠リ居リ候人数三百人程、浦内へ除舟ニ乗り組ミ居ル人数共ニハ五六百人ニてもこれ有ルべく候、右三ヶ所より飢ニ有リ候間救イ候様、左無ク候ハ、驅ケ出シ候など喚キ立テ候由、村方へハ八九拾人も逃ゲ残りこれ有ルべく候、大方船持の分ハ他国へ逃ゲ去リ、船持タズ候ハ他村へ逃ゲ候カ、庄屋宇治之助も煩付キ候趣申上候由

これによると、崎津村は疱瘡病人を正確に把握できないほど混乱し、小屋掛している病人が看病人ともに二〇〇人、梅木山へ逃げたもの三〇〇人、浦内の舟に五、六〇〇人、村方に逃げ遅れたもの八、九〇人とある。当時の人口二四五七人（文化六年）と比較すると、半数程度の状況であるが、疱瘡患者が看病人を含めて約二〇〇人いることがわ

かる。この時の死者も不明であるが、文化六年と文化一二年の総人口を比較すると、五一一人減少している。文化一〇年も含めた六年間の合計であるが、この疱瘡の影響が大きいと考えられる。

天保五年の疱瘡の記録には、崎津村の疱瘡流行に際して夫食手当に關する長崎代官高木作右衛門から幕府勘定所への届書がある。⁽⁴⁰⁾これによると「天草郡村々之儀、前々より疱瘡を嫌ひ都而疱瘡不仕土地御座候処、書面崎津村之儀当春以来与風煩付、次第二疱瘡流行仕候」とあり、天草郡全体が昔から疱瘡を嫌っている土地柄であるが、春以来崎津村で流行していると記されている。この届書には続けて、享和元年の触にあつたように組合村々からの救物や、身元相応の者（銀主、豪農層）に夫食の手当を命じているが、領主である代官所、幕府勘定所の手当についても申付けたとある。疱瘡の際には、近隣の村、郡内の村や富裕層、そして領主の支援があつたことがわかる。

この時人口一八五一人中五〇七人（二七％）が疱瘡に罹患し、三三八人（一八％）罹患者の六六％が死亡している。人口比で計算しても享和元年の一〇％に比べて高い死亡率であるといえる。この疱瘡は、異宗回信者だけであるが前後の宗門改帳からみると、文政一二年（一八二九）六三九人、三年後の天保三年五九五人で四四人減少に比べ、疱瘡後の天保一〇年三〇九人で七年間に二八六人減少しており、人口に大きな影響を与えたといえる。人口が最大となった文化五年（一八〇八）二四六六人と比べ、弘化（一八四七）四年には一三三九人となり、約四〇年で五四％まで減少、ほぼ半減したといつてもよい。疱瘡だけが原因ではないが、主たる要因であつたことは間違いない。

疱瘡と同様の流行病による大量死亡に文政五年（一八二二）の熱病流行がある。先述した長崎代官の記録に一〇月一七日崎津村の一五七軒中八六軒（全体の五四％）を焼失する火事に関する書付がある⁽⁴⁾。

この文中に「此節熱病流行いたし日々死亡之もの多候故、一同相恐多分近村々江逃延、又は漁業船住居二而村内少人数二有之」とあり、消火が遅れた理由を記している。文化一〇年の疱瘡のように、村民が他村や海上に避難するほどの熱病流行で多数の死者が出た。該当年の宗門改帳がないため、どれほどの被害か不明であるが、疱瘡と同じく人口に影響を与えたと考えられる。

この他、大量死亡の原因として船の事故がある。弘化二年（一八四五）「異宗回信之者踏絵帳」「巳年宗旨御改踏絵帳」には、「六月三日難船死去」と書かれた者が多い。この年の死者を記す翌年の「増減書上帳」には死者七六人中、六月三日死亡が五四人と突出している。死者全体の七一％を占め、性別も男六六人、女一〇人と男性に偏っている。詳しい経緯は不明であるが、崎津村の主要産業である漁業で出漁中、または船で作業中に難破して大量に死亡したのであろう。

三―二弥七家の五六人家族、本家と小屋

享和元年（一八〇一）「酉年宗旨御改踏絵帳」には、六五軒一二二六人が記されている。⁽⁴²⁾この中で最大の家族数は弥七家の五六人（男二六、女三〇）である。この家は家族数が多い他に、いくつかの興味深い事実が明らかになった。まずこの五六人の内訳をみていくと弥七の女房と子供七人、両親二人、弟家族四人、妹とその子二組四人、

妹と姪六人、従弟家族三組二六人、従弟六人、伯母一人となる。夫婦を単位に数えると六組、母子二組となる。この弥七家、四年前の寛政九年（一七九七）には四六人、寛政一二年五四人と増加している。

寛政九年には弟惣太郎の女房こや、娘ひろ、とめが「甚右衛門方参り」とある。既に娘ひろ九歳、とめ二歳であり、事実上夫婦関係にあり足入れ婚的な状況と考えられる。この三人、享和元年の疱瘡流行で、疱瘡病人となっている。弥七家五六人中、疱瘡による死亡は一人であり、夫惣太郎も罹患していない。対して女房こやの実家甚右衛門家は三〇人中一〇人死亡するという高い死亡率である。このことからこやと娘は、甚右衛門家に住んでいた、または頻繁に同家を訪問していた罹患した可能性が高い。その後、この三人は回復し、文化一四年（一八一七）まで生存が確認できる。

この弥七家、享和三年には三家族に分割している。まず①弥七、弟惣太郎、両親、妹母子の二四人、②従弟虎之助二二人、③従弟浅之丞、弟吉蔵、弟千之助二一人である。この中で興味深いのは①の弟惣太郎、③弟吉蔵に別筆で家頭とあり、人数も別に計算されている。また従弟浅之丞の弟千之助は家頭とあるが抹消されている。これらの家頭と記入された惣太郎、吉蔵は次の宗門改帳（文化五、一四年）では別家となり、合計五家族となる。この弥七家の事例では大人数の家族が、高齢の両親を除く夫婦を単位に分割していく過程がわかる。

これは先述した文政五年（一八二二）の火事の文書で、焼失した八六軒は本家であり、他に「外四拾四軒、小屋住居家主二不相立分、内式軒物置」「家内人別竈小屋住居四拾式軒之もの」と、四二軒の小

屋住居の類焼者について記していることからうかがえる。⁽⁴³⁾ここでは本家と小屋の区分があり、小屋住居者は家主ではないことがわかる。享和元年までは弥七のみが本家で、惣太郎、虎之助、浅之丞、吉蔵は小屋住居であったが、享和三年には虎之助、浅之丞が本家となり、それ以降惣太郎、吉蔵が本家となったといえる。吉蔵弟千之助や弥七妹ひろやんにも子供がいたが、原則は夫婦と子供を基準として小屋から本家になったと考えられる。

なぜ享和三年に分割されたのか。崎津村の家数をみていくと、元禄四年六〇軒、宝暦十一年一二三軒、寛政元年一三七軒、文化二年二〇九軒と増加する。寛政元年の人口は二四二九人、一軒あたり一七・七人、文化二年二二六八人、一軒あたり二一・三人と減少しているが、家数は増加している。これは先にみた享和元年の疱瘡流行後、家族を詳細に把握するため家を分割していったと考えられないだろうか。しかし文化一〇年の疱瘡流行時には家数は減少し、一軒あたりの人数が一人増加しており、次の天保五年の流行時には家数は維持されるが一軒あたりの人数が三人減少しているため、すべてを疱瘡流行が原因とすることはできない。享和元年に関してはその可能性が高いことを指摘するにとどめたい。村山聡の研究によれば、隣村高浜村の天草崩れ直後の宗門改帳の分析から、かくれキリシタンの吟味により拡大家族的な登録が、単婚小家族の単位となったことを指摘している。原因は違うが崎津村と同様、支配の把握単位の変更による家族記載の変化した事例である。⁽⁴⁴⁾

最後にこの弥七家における文化二年の天草崩れの影響を考えてみた

い。直後の文化五年「辰年宗旨御改願踏帳」、文化一四年「異宗回信之者踏絵帳」をみていくと素人、異宗回信の二つにわかれている。異宗回信は弥七の倅太郎家、弟惣太郎家、従弟忠蔵（虎之助の改名と考えられる）、素人は従弟浅之丞、その弟吉蔵である。これらの家は、弥七の父孫平治の兄弟につながる家で元は同じ一族である。しかし異宗信仰に関しては、各家の選択は同一ではなく相違していたといえる。

おわりに

以上、三章にわたり崎津村宗門改帳の史料群について分析を行い、次の点が明らかになった。①この史料群が、昭和初期の現地調査による長沼賢海の発見、論文公表により世に知られることとなり、昭和三〇年代には九州大学九州文化史研究所に保管されるようになった。②天草では人口の多い村の宗門改帳は複数冊作成されたが、崎津村は天草崩れ後に異宗回信、素人という新たな集団設定が行われ、その基準によって新しく分冊が行われ別帳化した。③崎津村の一九世紀における人口減少に、三回の疱瘡流行が大きく影響した。④大人数の家族には夫婦を単位とする集団「小屋住居」が複数あり、これらの本家への分割が、崎津村全体の家数の増加に影響した。家数の増加には疱瘡流行が影響している可能性がある。⑤天草崩れにおけるキリスト教信者であった異宗回信が七割を超える崎津村において、同じ一族でも信仰を異にする場合がある。

今回は、一部の宗門改帳のみの分析となり、疱瘡や家の分割、異宗

信仰について部分的な指摘にとどまった。今後、宗門改帳全体の分析を進め、一九世紀の天草の村の実態をより詳細に明らかにしていきたい。

注

- (1) 「天草崩れ」の詳細な経緯については、平田正範の研究に詳しい。(浜崎献作編『平田正範遺稿 天草かくれキリシタン・宗門心得違い始末』サンタ・マリア館、二〇〇一年)。
- (2) H・チーリスク、太田淑子編『日本史小百科 キリシタン』東京堂出版、一九九九年。
- (3) 大橋幸泰「キリシタン民衆の結合意識―文化期肥後天草における天草崩れ・村方騒動を素材として―」『民衆史研究』三八、一九八九年(再収『キリシタン民衆史の研究』東京堂出版、二〇〇一年)。
- (4) 平田豊弘「天領天草について」本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書御用触写帳』(以下「御用触写帳」と略す)一、一九九五年、一七頁。
- (5) この時の庄屋は吉田龍太郎であったが若年のため、文政四年(一八二二)上田宜珍が庄屋後見となっている。(角田政治『上田宜珍伝』、一九四〇年)、一九七頁。
- (6) 『天草郡史料』一、天草郡教育会、一九一三年(再版、臨川書店、一九八六年)、五五九～五六一頁。
- (7) 森永種夫編『長崎代官記録集』中、犯科帳刊行会、一九八六年、二二三頁。
- (8) 福連木村庄屋尾上家文書(宮本又次「天領天草の商業と問屋」『九州文化史研究所紀要』二、一九五一年、七九頁所収)。
- (9) 『天草郡史料』一、六九頁。

- (10) 宝暦十一年(一七六一)、明和五年(一七六八)、寛政元年(一七八九)の崎津村明細帳には唐通詞一人と記されている。(天草古文書会『天草郡村々明細帳』中、一九九〇年、三七四、三七九、三八五頁)。
- (11) 舟橋明宏「天草郡地役人の存在形態と問屋・船宿」渡辺尚志編『近世地域社会論―幕領天草の大庄屋・地役人と百姓相続―』岩田書院、一九九九年、三六四頁。
- (12) 前掲『天草かくれキリシタン・宗門心得違い始末』、五四頁。
- (13) 崎津文書二、天明二年宗旨御改増減帳、以降崎津文書の出典は表一を参照のこと。
- (14) 九州文化史所蔵写本、文化三年(C一三三―三―四)、嘉永五年(C一三三―一―八)、安政三年(C一三三―三―二二)。
- (15) <http://bunkashit.kyushu-u.ac.jp/>、二〇〇八年九月二九日確認。
- (16) 檜垣文庫、文化三年四月「寅年宗旨御改影踏帳」二二八―四、享和元年二月「酉年宗旨御改願踏帳」一九〇―六、「覚(明治初期の戸籍)」二四七―一。文書名の後の番号は九州大学附属図書館六本松分館編『檜垣文庫目録』追補一、二〇〇三年による。
- (17) 前掲『檜垣文庫目録』追補一。
- (18) 梶嶋政司「史料紹介」草創期九州文化史研究所の史料収集活動―『探訪日記』の紹介―『九州文化史研究所紀要』四九、二〇〇六年、七一頁。
- (19) 『日本海事史研究』、九州大学出版会、一九七六年、『日本宗教史の研究』、教育研究会、一九二八年。
- (20) 前掲『日本宗教史の研究』、八七〇頁。
- (21) 『史学雑誌』三九一―二、(再収、藤野保編『九州と外交・貿易・キリシタン(Ⅱ)九州近世史研究叢書六』国書刊行会、一九八五年、二九七頁)。
- (22) 前掲『日本宗教史の研究』、八七七頁。
- (23) 九州文化史所蔵写本C―三―三―五。
- (24) 九州文化史所蔵写本C―三―三―四。
- (25) 前掲『日本宗教史の研究』、八九八頁。
- (26) 天草古文書会『天草郡村々明細帳』下、一九九三年、二八七頁。

- (27) 前掲『天草郡村々明細帳』下、七九頁。
- (28) 文政四年書写、『天草郡村々明細帳』上、一九八八年、二二三～四頁。
- (29) 上田家文書は熊本県天草市の上田陶石有限会社社が所蔵。なお文書目録は天草町教育委員会編『天草町上田家文書目録』一九九六年として刊行されている。
- (30) 天草町教育委員会『天草郡高浜村庄屋 上田宜珍日記』（以下「上田宜珍日記」と略す）文化一二年、一九九一年、一〇一頁。
- (31) 上田家文書二九一六～二九一七。
- (32) 『御用触写帳』二、一九九七年、二九四頁。
- (33) 『上田宜珍日記』文化四年、一九八九年、八二頁。
- (34) 『上田宜珍日記』文化四年、八二頁。
- (35) 檜垣文庫一九〇一六。
- (36) 『天草郡史料』一、一七三頁。
- (37) 『御用触写帳』一、一九九五年、二四九頁。
- (38) 『上田宜珍日記』寛政一三年、一九九七年、七五～七六頁。
- (39) 前掲『天草かくれキリシタン宗門心得違ひ始末』二二三～二三四頁。
- (40) 『長崎代官記録集』中、一九三頁。
- (41) 『長崎代官記録集』上、犯科帳刊行会、一九八六年、五〇～五一頁。
- (42) 檜垣文庫一九〇一六。
- (43) 『長崎代官記録集』上、五〇～五一頁。
- (44) 村山聡「海の支配と隠れキリシタンのライフコース」(落合恵美子編『前工業化期日本の家族とライフコースの社会学的研究―地域的多様性の解明と国際比較―』、平成一三～一六年度科学研究費補助金基盤研究(B)、二〇〇五年、八三～九六頁。

追記 なお本稿は二〇〇六～二〇〇七年度、日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B))「日本近世宗門改制度に関する基礎的研究」の研究成果の一部である。

(二〇〇八年一〇月一日受理)
(ひがし のぼる 文学部准教授)